

■ 報告 ■

日本，岩手大学教育学部，そして盛岡

崔 肃 京*

(1988年1月20日受理)

Cui Su jing

My Impressions of Morioka, the Faculty of Education of
Iwate University and Japan

日本にきて、もう2カ月すぎた。本当にあっと言う間だと言ってよい2カ月だった。しかし、このあっと言う間だと言うあいだに私が体験し、勉強したものは大学4年間で一生けんめい読んだり、書いたりするのにまさる。実際の言語の社会で、自分が習った日本語のレベルを判断し、それよりも一衣帯水の国にきてさまざまな人との交流を通じて、もう少し自分を充実させたい。これが私の今度の日本留学の目的であった。

日本への留学にあたって、私はまず、私の留学の機会を与えて下さった元農学部長石川武男先生にあつくお礼申し上げたい。もし、石川先生の橋渡しがなかったら、今後の私の留学は不可能であったろう。それから、私の研究と勉強にあつてご協力下さった駒林邦男先生と長江好道先生、望月善次先生、私の生活のこまかいところまでご配慮下さった川部玲子先生といろいろお世話になった教育学部の皆さまと農学部の内藤弘先生と菅原長男先生をはじめとする皆さまに心からの感謝の気持ちを申し上げたい。

岩手大学教育学部での勉強

私の留学の目的が短い時間を利用して、もう少しものを習って帰りたいと言う事であるので、来てすぐ授業といろいろな先生の講義に出た。主に駒林邦男先生の「教育方法」と「道徳」の授業、長江好道先生の「外国教育史」と「教育学演習」の授業、大沢俊成先生の「対比言語」の授業、望月善次先生の「国語教育」の授業と大野真男先生の「日本文法」の授業と大野真男先生の「日本文法」の授業をきいた。

駒林邦男先生の教育方法の授業では、先生がお書きになった「子供は授業で何を学んでいるか」という論文がテキストとして使用された。この論文は1987年9月、岩波書店から出版された『教育の方法』という講座の第3巻の「子どもと授業」の中にある論文で、論理性が強い文章であった。

1億2千万人の日本国民の4分の1の3千万人が今学校で学んでいるが、6歳から20歳前後の子供たち、若者のほぼ100%が9カ年、94%が12カ年、40%前後が大学、短大・専修学校で学んでいる

* 吉林農業大学助手，岩手大学客員研究員

とすることである。

「学校化社会」化がこのように進んでいる日本社会で子供は授業で一体何を学んでいるかというのが先生の質問であった。つまり、学生は学校で制度化された知を学んでいる。学生は学校で勉強することの大半は試験でしか役に立たないけれど、試験にとおるかとおらないかは、その後の自分の現実を左右する(らしい)から役に立たないことを頭にいっぱいつめこむことも役に立つことなのだと思って勉強していると、頭につめこむものについてどんどん無関心になっていく、という山田太一さんの言葉を引用して、今日の日本の教育状況を端的に指摘した。授業中におしゃべりする、授業をきかない、先生の言う事をきかないといった状況が平常化し、学校ぎらいの学生が増加し、そして、学びの疎外の全般化という問題状況の中で、教師が一斉授業を改革していくためには達成しなくてはならない課題があると、先生はその課題の帰着点も2つ指摘した。課題の第1は「お仕着せ」のようにあたえられた教育内容、教科内容を自分の授業内容とし、この内容をまた「お仕着せ」のように、窮屈な時間の枠によって制約された管理空間の教室の中で子供たちに効率的に教え、授けるのが授業という教師の仕事だという授業観を吟味し直すことである。次の課題は教科書、指導計画、教育課程、「学習指導要領」を批判的に検討し、「学び経験の全体、学びの履歴全体」としてのカリキュラム(特にポジティブな、またネガティブなヒドウン・カリキュラム)との往復運動の中で「意図、計画」としてのカリキュラムを開発発展させる実践的、理論的力量を獲得するという課題である。これらの課題を達成していく過程で、授業中の制度化された知を縮め、潰していく可能性が開かれ、ヒドウン・カリキュラムのネガティブな部分をポジティブなものに組み換えて、ヒドウン・カリキュラム全体を活性化し、これをヴァナキュラーな、自律的な学びへと接続させる可能性が開かれていくであろうと言うのが先生の見

方であった。

先生の著作の外に、先生から本多勝一さんの『日本語の作文技術』と、丸谷才一さんの『文章読本』すいせんされて読んだ。外に柳父章さんの『翻訳語成立事情』と石綿敏雄さんの『日本語の中の外国語』と言う本を頂いたが、国へ帰ってじっくり読むつもりである。

先生の「道徳」の授業にも出たが、テキストとしては宇佐美寛さんの『「道徳」授業をどうするか』という本が使用された。先生の道徳の授業で一番印象深かった言葉は「他人に犠牲を強制してはいけない」と言う言葉であった。

長江好道先生の「外国教育史」の授業では先生がおかきになった『日系人の夜明け——在米一世ジャーナリスト浅野七之助の証言』という本が参考書として使用された。この本は今年の10月に岩手日報社から出版され、今ちょうど本屋にらんでいる。この本は大量な外国文献と資料を使用して、ジャーナリスト浅野七之助さんのライフヒストリーの一部を通じて在米日本人の苦闘の歴史を描いた。日本人にとってもアメリカの日系人史はなじみが薄い分野であり、小学校から大学に至るまでアメリカ史は教えるが、日系移民の歴史については教えたことがないということで、今度の先生の本は日本の歴史におぎなうべき新しい事実を世の中に告げた。

先生から、山住正己さんの『日本教育小史』と伊ヶ崎暁生さんの『文学でつづる教育史』と言う本をすいせんされ読んだ。それから日本の歴史、地理、社会についての本もすいせんされた。

私の専門が日本語であるから、国語科の望月善次先生と大野真男先生から沢山教えて頂きたかった。望月先生は、週に1回、特別講義をなさって下さった。藤田正春さんの「日本語教育から見た国語教育」という資料を教材として使用した。資料は詳細な調査の結果で日本語教育上の問題点を述べた。その中で私たちが注意すべきものをいくつか提出した。まず音声上の問題であると言うこ

とで、日本語学習者が赤ちゃんを見て「カワイイですね」と言ったつもりが、「コワイですね」とききとれたりする。これは日本語の音声学習上の具体的な例である。もっとはっきり言えば、日本語学習に見られる一般的な音声学習上の問題点としては、①有声音と無声音の対立が有気音の対立に置きかえられる。②拍感覚の習得が不完全である。③高低アクセントが身につかない。それから文字の事であったけれども、非漢字圏の学習者にとって、漢字が問題点となるのは周知のとおりである。漢字が問題点となるのは周知のとおりである。日本語と学習者の母語との間で、同じ漢字でも意味上のずれが生じる場合があるということである。例えば、私たち中国人はよくまちがっている言葉がある。「手紙」は中国語では「トイレットペーパー」を意味し、「新聞」が「ニュース」の意味だったりする。

望月先生から『日本語教師読本』と「国文学—日本人の心のための日本語セミナー」という資料をすいせんされた。

英語教育の大沢俊成先生から、対比言語について教わったが、今まで気付いていなかったものをならうようになった。「スタートする、出発する、はじまる」この3つの言葉の微妙な差は何であるかというふうにかまかく分析して教えていただいた。音素対立による発音練習もしたが、私にはtとdの混同があると言われ、一生けんめい練習したが、よく気をつけないとまたくせが出るということである。日本語は今年まで7年目になるけど、なかなか難しい言語だと思う。

大野先生の日本文法の授業にも出た。北原保雄さんの『国語学研究法』が教材としてつかわれ、主に文の成分、単語と品詞類、活用しない自立語活用する自立語についてならった。たまには橋本進吉の『国語法研究』という本から資料をとって、私たちにくばって下さった。大野先生から寺村秀夫さんなど編集したケーススタディ『日本文法』という本をすいせんされた。

勉強の外に、日本にきて、何人かの先生に中国語を教えた。いわゆる言語の中で中国語ほど難しいものはないと、学習者から、よくきかされた。理科研究室の井上雅夫先生と人文社会科学部の中国語サークルに行って、発音の指導をした。今まで中国語を教えた事のない私も、今度の留学を通じて、日本人が中国語を勉強する上での問題点を少し見つけた。われわれ中国人が日本語の“ひ”と“し”の区別がよくつかないように、日本人はcとzの発音の区別がつかない。それからdとtの区別もなかなかできないのである。これは多分母語の影響だと思う。

日本と盛岡の印象

まあ、湿度が多いなあ、これが私が日本についたばかりの一番最初の印象だった。北京は内陸性気候なので、その時、非常に乾燥して街をちょっとあるいても、のどがかわいて、すぐ何か飲みたくなった。しかし東京についたら北京と全くちがった天気で、飛行機からおりるとしめっぽい布につつまれたような感じだった。それからおりたばかりの空港の空でカラスがかあかあとないたが、どうも気持ちわるかった。中国ではカラスは不吉の象徴で、とくにカラスのなき声は、誰にもいやがられるのである。実はこれは昔の迷信にすぎない言い方だが、根強い封建的意識だと言ってもいいくらい思想が私の心と頭のどこかにひそんでいるのは言うまでもないが、当時の気分はたしかによくなかった。日本人は自然を愛する気持ちが強く、植物だけでなく、動物の保護と管理が非常にととのっている事は中国にいた時もよく知っていたが、カラスまで、空の上空を自由に飛び、また何のこだわりもなく、大都市でかあかあとないた事は本当に思いもよらなかった。自由の国のシンボルであろうと頭の中から何かびんと浮べてきたが、日本人の自然を愛する気持ちには頭を下げたくなかった。

まず、私が日本にきて、もっとも強烈に受けた印象は日本人のせわしい一日の生活だった。話しのスピードから道を歩く姿、食事から働いているふりまで、本当に感激するほどだった。街を歩いても何十台もある車がぱっぱと走り出し、部屋でテレビを見ても、ほんの少しだけの番組を除いて、ほとんど、にぎやかで、さわがしさのあるものばかりだった。どうも日本全体が朝から晩まで沸騰するような感じだった。私のようなのんきな性格の中国人とは全くちがった世界で、人々が一生けんめい働き、一生けんめいはしり出すのであった。なんだか、少し不安もあって、この様子だったらいつまでも遅れるのではないかと、食事をするスピードから歩き方もなおさなければならぬ気がした。

しかし、私はこんな日本人の忙しい生活の中で、何か私たちがかならず学ばなければならないいいものを見つけたのである。それは、すなわち日本人は、私が知っている日本人は、実に勤勉で、真面目に働き、しかも責任感が強く、仕事の効率が高い、というわれわれ中国人がこれから国の現代化を目指して、奮闘するのに摂取しなければならない大切な経験ではないかと、つくづくと感じたことである。例えば、日本人自身も、日本の社会を情報化社会だと言っているが、私も同感だ。テレビの番組が一番目立ったが、その情報化の程度は本当にものすごかった。夕べ、どの県の、どの町で何があったと、朝のニュースにはかならず報道され、新聞の夕刊にかならず載るのであった。手紙も翌日ぐらいは相手の手に届けるし、貨物の運送も夜に日をつづけて、短時日内に注文者におくられると言う、そのいきおいはまさに新幹線あるいは高速道路を走るようなスピードだった。だから日本人の信用と言うものは何よりだった。約束した事はちゃんと守るし、もし何かあって決めた時間に出ない場合にはいくら忙しくてもお電話ぐらいはするのである。望月善次先生がその中のお一人なので、人に対しての真面目さにいつも感嘆し

た。私も日本にきてなおった事がある。2カ月間に、他の人のようなせわしなさはなかったが、いつも誰かに追われるような感じがした。別に目立ったかわりはないが、歩き方がずいぶん早くなってしまった。石川武男先生も中国にいらっした時、中国人に歩き方が早い、それからあまり仕事なさるとよく言われたが、その元気一杯の姿と、効率の高い仕事ぶりには吉林農業大学の先生方と学生たちの高い評判を受けた。先生が中国に滞在したわずかの1カ月間、われわれ中国人がその先生に学ばなければならない点をたくさん見つけた。

教育学部で勉強した2カ月間、私は石川先生のような先生を沢山見るようになった。農学部の内藤弘先生のようなのんびりした性格の先生もいたが、せっかちな人はもっと多かった。まず、学部長さんの駒林邦男先生だった。私が先生に初めてあいさつに行った時、大変困ってしまった。その前までは、どこへ行ってもまずうやうやしいあいさつからだんだん会話がすすんだが、先生はそうでなかった。最初から受けた印象はきびしい先生ではないかと、後3カ月どようにつきあうか、大変心配だった。さらに荘子の有名な言葉から質問がどんどん出され、汗までかくようになった。さすがのきびしい先生だなあ、まるで受験のテストを受けるようで、帰ってきて胸がどきどきした。でも頭の中には“ちょっとちがうなあ”と言う一種自分も言えない吸引力があった。その吸引力と言うのはつまり、先生の学問の豊かさは言うまでもなく、いつまでも消えることのない、若者にまさる生きいきし、情熱にあふれた姿だった。だから、この2カ月間、先生と一緒にいたら先生が私の父となれる年（父は現在49歳）だとはほとんど思わなかった。どうも同年代の人と交談している感じで、親しく思うようになった。幼い時から読書が好きで、おやからもらったこづかいで、本を買って読んだと言う読書談、夢中に研究と博覧群書をつづけながら、ロシア語も自習して翻訳もずいぶんなさったと言うお話し、私が先生につ

いて習ったものは実に多かった。

長江好道のお名前はわれわれ中国人になんとか親しみのあるお名前である。中華民族のシンボルの長江と黄河に趙兰坡先生も、すばらしいお名前だと何度もほめたのである。アメリカに留学し、嬉しい時はいつもOKと、私たち中国人に会ったら、ニイハオと、中国語であいさつする先生は欧米人のもっている朗らかな性格の人だった。私の見方がまちがっているかも知れないが、北の方で生まれた人の中には明るい性格と、寛厚な性格の人が多く、先生も北海道のご出身で、学者でありながら「風度」(態度、物腰、仕方)と、人間的な明るさを両方とも持ち主であった。最近、先生のお書きになった『日系人の夜明け』という本が出され、本屋にきちんとならんでいるのを喜んで見た。5年もの時間がかかったこの著書には先生の心血がどれほど注がれたか、私も一冊頂き、大切に持って行くつもりだ。先生が幼稚園長をなさっているのだ、この間、先生に幼稚園へ案内して頂いた。附属幼稚園へ入るのは大変難しいと、入る前からテストもあり、ここに入ると、後無事に附属小学校と中学校へ進学することであった。

幼稚園としては大変整っている感じのあるところだった。選ばれた子供たちか、さすがだなあとびっくりするほどだった。子どもたちは私が中国からきた先生と長江先生からきいて、すぐ私をとりかこんであれこれ、さかんに質問した。中国の子供たちはどう言うふうにして遊ぶか。中国にもお化けがいるか、中国語ニイハオを知っているし、英語の単語もかなりおぼえていた。どうしても何も知らない幼い子供たちとは全然おもえなかった。ある質問にはどう答えたらいいか、とまどって大変困った。子供たちがあまりにもかわいいので、この間もう一度幼稚園へ行って見た。活発で、本気のその顔々が今まで、後、中国へ帰っても忘れられないだろう。本当にその中の一人を抱いて中国へつれて帰りたい気持ちもあった。長江先生はこんな幼稚園のため、毎日、精一杯仕事を

なさっているのだ。少しお話しがかわって、非常におもしろいお話でもあるが、おくさんがつくってくれたお弁当をもっていたつもりで、お昼にさがしたが、忘れてきたのがやっとわかったと言う長江先生のお話だった。先生の毎日の生活はたしかに忙しかった。私が今までつきあった先生の一日は時計のお針といっしょにはしるように、こつこつお仕事をなさる一日だった。望月先生もその中のお一人で、夜の研究会が終わって、夜汽車で外の県の会議に出かけると言う真面目で、親切な方だった。

私は2カ月間、ずっと大学生たちと授業をきいた。大学を卒業して今年は3年目になり、日本へ来る前は教える立場だったが、ここにきては大学生時代にすっかり帰ったような気がした。もう一度学生になってからやっと、教えて上げるほこりと、教わる珍しさがわかった。それも駒林先生と長江先生、望月先生、大野先生、それから大沢先生のような立派な先生方に教わったと言うのは何よりのほこりである。国へ帰ったらいい資本になるかも知れない。中国と日本は社会制度がちがひ、教育システムも異なっている。中国での教育目標は、できるだけ一日も早く社会主義建設に有用な人材を育てる事で、全力を尽している。1977年から新しい教育制度ができ上がり、能力のある人が大学に入るようになった。卒業したら、社会の需要に応じて、各々の職場に行き働く。日本は中国と少しちがっていると思った。大学もまず国立・公立・私立等いろいろな形で運営され、学生も、自らの趣味と自らの需要によって仕事につくと言う事である。だから、私は日本の大学生は中国の大学生より、自由であり、のんきな感じがした。中国では大学に入っても4年間、ずっと一生けんめい勉強しなければならない。卒業する時も、成績の如何が大変大切であって、4年間、別に楽に遊ぶ事などほとんどできない。私の大学生時代もそうであったが、朝は朗読、午前は授業、午後と夜は自習と復習で、誰でも、勉強に追われた4年間だった。

非常に面白く思うのは、授業が始まって、30分もすぎて教室へ入る学生がいる事だった。それも有名な先生の授業で、遅刻しても別にはずかしく思ったり、すまない気持ちでいたりするようなことでなく、大変平気で、資料がないから下さいと、前にいくのだが、先生も穏やかで何のお話もない。どうぞ、と上げるのであった。私はどうも不思議でならなかった。いくら陽気があっても、30分もおくれて、それも資料を求めに前に立つのは、私にとってはとてもできない事である。もし、そのぐらい遅れたらあっさり入らないで、次の授業にどうして出なかったと理解してもらった方がいいじゃないかと私は思っているけど、何と言っても先生の講義中に入るのは何よりの失礼だと、もし、私の学生がそうだったらかならずちょっと批判ぐらいはしなければがまんができないのである。人にとって自由はたしかに必要なだが、あまりのほどのすぎの自由は少し制限したくなるのだ。

石川先生は中国の学生は真面目に勉強しているとおっしゃったが、受験戦争のはげしい事は日本とはほぼ同じである。もっとはげしいかも知れない。日本の学生はあまり勉強していないと私がここに来てから常にきかれるが、真面目に勉強する人もずいぶんいると思う。でも日本の学生は個性が強いのである。おそらくこれは小さい時から育てられた結果だと思うが、附属幼稚園の教育の目標の中にも、個性の強い人間に育てると言うものがあった。個性の強さは中国の学生にまさる。精神状態の豊かさはどうであるかわからないが、自らの趣味にしたがって、自分の将来をきめると言う事は大事な事だと思う。

いろいろな授業をきいたが、授業は活気があって、先生と学生の配合がかなりよかった。教師は学生に注ぎ式の教育方法を取るのではなく、啓発的な手段をつかって授業をうまくすすめるのである。学生の答えがまちがっても別にはずかしく思ったりする事はなく、自らの考えているそのものを、そのまま、堂々と述べる。われわれ中国人にはこ

の点が少し足りないのである。教える人も、教わる人も、この点はずっと大切だと思う。

さて、お話しは全くかわるが、この2カ月間、私は普通の家庭に入って、全く日本人と同じ生活をしてきた。朝出勤の時間には自転車で学校まで、デパートへもバスとか自転車で通した。顔だちが日本人に似ているせいかな、どこへ行っても、私を外国人あつかいはしなかった。食事でもだんだん慣れて、今は何でも食べるようになり、もし、国へ帰ったら、却ってこっちの飲食がなつかしく思われるかも知れない。初めて生たまごを食べ、大根おろしも毎日かかさず食べるおいしいおかずになった。中国人は生ものはあまり食べない。だから、きたばかりに生たまごが出されたら、びっくりしてどう食べるかきいた。なまで食べるなんてはどうしてもできなかったが、なれてからはこれまた別味だった。天ぷらも、すきやきも、おすしも、それから長江先生のおくさんのつくったおかしと、内藤先生のおくさんがつくったわかめのお料理が口にぴったりあって、非常においしかった。

日本の紅葉もきれいで、私は10月にきたので、ちょうど、秋のすばらしい景色を見る事ができた。農学部の渡辺潔先生のご招待で、十和田へ行って見たが、紅葉は話しそのとおりの壮観だった。燃えるようなあかいもみじはなんとなく、私を今まであたたく世話してくださったいろいろな方のようにも見えた。そうだ、日本にきている間はいろいろな方に本当にお世話になった。一生忘れる事ができないと思う。中国と日本はいつまでも仲よしになってほしいとねがっているが、きっとそうだろうと思う。日本の先生方も中国へいらっしゃるチャンスがかならずあると私は信じている。その時は、私が中国で今の先生方のように世話して上げるつもりである。

3カ月は短かったけど、いろいろ勉強ができて、大変嬉しく思う。後、機会があればもう一度ここにきて、こっちの先生方の学生になりたい。その日を心待ちながら……。